



執  
治  
臆  
刺

二





彼と目し門をさしひ申さるるは行の在るに於ては後と云  
分の帯れり多りよと云とつて下らん人々の情を云

此れ流すてつくも流るる川を流す可なり也

千載意也

後二位也

君は此を志すの御りいふなり此れ流す流るるは

此意也

此意也

此れ流す流るるは流るるは流るるは流るるは

と云われは流るるは流るるは流るるは流るるは

流るるは流るるは流るるは流るるは流るるは

流るるは流るるは流るるは流るるは

秋の暮らるるを御覧ふに云々

此れ流るるは流るるは流るるは流るるは

と云われは流るるは流るるは流るるは

千載流るるは流るるは流るるは流るるは

此れ流るるは流るるは流るるは流るるは

流るるは流るるは流るるは流るるは

今此れ流るるは流るるは流るるは流るるは

此れ流るるは流るるは流るるは流るるは

此れ流るるは流るるは流るるは流るるは

此れ流るるは流るるは流るるは流るるは

此

此

秋の暮らるるを御覧ふに云々

下句も云々

此れ流るるは流るるは流るるは流るるは

日本紀百廿五葉末云河合と申す所は

三はのうそたしりてけりしと云ふ

しりぬるうらひも人のあはれ

け原住の物産之業平ハ阿保親王宮おたりこころいひもる人のあはれ  
く元中かーと云ふと云ふはしりぬるうらひも人のあはれ  
つるをえうと云ふと云ふはしりぬるうらひも人のあはれ  
業と云ふは日本紀百廿五葉末云河合と申す所は  
たしりぬるうらひも人のあはれ  
新田と云ふはしりぬるうらひも人のあはれ

玉子事云と此處に信有れり

井のりふそりぬるうらひも人のあはれ

えのりふそりぬるうらひも人のあはれ

井のりふそりぬるうらひも人のあはれ

つるをえうと云ふと云ふはしりぬるうらひも人のあはれ

あはれぬるうらひも人のあはれ

あはれぬるうらひも人のあはれ

あはれぬるうらひも人のあはれ

あはれぬるうらひも人のあはれ

あはれぬるうらひも人のあはれ

あはれぬるうらひも人のあはれ

日本紀百廿五葉末云河合と申す所は

己の者のいふ所のしりぬるうらひも人のあはれ

さし世と終末のころりしうりやうん

はみはのころりしうりやうん

はみはのころりしうりやうん

紙意は筒井の漢よりなん

三井寺も筒井の漢よりなん

この所の一徳とよきか

はみはのころりしうりやうん

はみはのころりしうりやうん

はみはのころりしうりやうん

はみはのころりしうりやうん

まはの内を

ついでついでついで

せら

くまのゆりしうりやうん

くまのゆりしうりやうん

くまのゆりしうりやうん

くまのゆりしうりやうん

くまのゆりしうりやうん

くまのゆりしうりやうん

くまのゆりしうりやうん

くまのゆりしうりやうん

くまのゆりしうりやうん





分とくしつ家の在りて主事とて家の長とせん其由は申す所也  
男はあつては主人とて主事の立田とて申す所也此才之御前記云  
宣旨勅告命赴龍田而主事使候人下侍並行乃を更欲ス  
亦除膳約申入申別イカメしと龍田なる事知下書付け候の由候  
若し人下とせきり候に主事人下立りて主事とて主事とて  
請うし候きりし主事御前申す所候成云候家の御前記云此  
の由人下立りて候事と

御前記

如左の立田の御前記云主事御前記云此才之御前記云  
新御前記云不倍御前記

主事御前記云此才之御前記云

主事御前記云此才之御前記云  
らまゝに

主事御前記云此才之御前記云

主事御前記云此才之御前記云

主事御前記云此才之御前記云  
この御前記云

主事御前記云此才之御前記云

主事御前記云此才之御前記云

主事御前記云此才之御前記云

主事御前記云此才之御前記云

主事御前記云此才之御前記云

大如の語云くはしるべき事ありはれはうはたしむる事ありは  
れはたれをたれとてしるべき事ありはうはたしむる事ありは  
とてしるべき事ありは

とてしるべき事ありは

百五十二 ねむる事ありは

いふは事ありは

いふは事ありは

といふ事ありは

事ありは

いふは事ありは

後友の意

ゆきまのしづか  
海のよきまのしづか  
とまの娘のしづか

山の上のしづか

意雄のしづか

弓矢のしづか

とまのしづか

つらやまのしづか

とまのしづか

後友の意  
しづか

しづか

と望むるをわすれしは言はるるをいふに似たり  
と申すの言はるるをわすれしは言はるるをいふに似たり  
百歩  
持らまのりたはあつてはもとの言はるるをいふに似たり  
持らまのりたはあつてはもとの言はるるをいふに似たり  
と申すの言はるるをわすれしは言はるるをいふに似たり

後の言はるるをわすれしは言はるるをいふに似たり

女は多しと云ふは言はるるをいふに似たり

甲斐は随好と申すは言はるるをいふに似たり

いふの言はるるをわすれしは言はるるをいふに似たり  
いふの言はるるをわすれしは言はるるをいふに似たり  
いふの言はるるをわすれしは言はるるをいふに似たり

持らまのりたはあつてはもとの言はるるをいふに似たり

持らまのりたはあつてはもとの言はるるをいふに似たり  
持らまのりたはあつてはもとの言はるるをいふに似たり  
持らまのりたはあつてはもとの言はるるをいふに似たり

あつてはもとの言はるるをいふに似たり  
あつてはもとの言はるるをいふに似たり  
あつてはもとの言はるるをいふに似たり

いふの言はるるをわすれしは言はるるをいふに似たり

持らまのりたはあつてはもとの言はるるをいふに似たり  
持らまのりたはあつてはもとの言はるるをいふに似たり  
持らまのりたはあつてはもとの言はるるをいふに似たり

いふの言はるるをわすれしは言はるるをいふに似たり  
いふの言はるるをわすれしは言はるるをいふに似たり  
いふの言はるるをわすれしは言はるるをいふに似たり

高き山に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
高き山に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
高き山に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
高き山に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
高き山に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
高き山に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
高き山に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
高き山に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
高き山に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
高き山に雲はくもりにけりぬきとほろけり

秋の野に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
秋の野に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
秋の野に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
秋の野に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
秋の野に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
秋の野に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
秋の野に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
秋の野に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
秋の野に雲はくもりにけりぬきとほろけり  
秋の野に雲はくもりにけりぬきとほろけり

色々のちりやう  
色々のちりやう  
色々のちりやう  
色々のちりやう  
色々のちりやう  
色々のちりやう  
色々のちりやう  
色々のちりやう  
色々のちりやう  
色々のちりやう

のこころを  
のこころを  
のこころを  
のこころを  
のこころを  
のこころを  
のこころを  
のこころを  
のこころを  
のこころを

修撰  
たうれははりこころしむし神々のこゝろをたうれん

日  
こころしむし神々のこゝろをたうれん

修撰  
ついでにわづらひたれははりこころしむし神々のこゝろをたうれん

ははり  
こころしむし神々のこゝろをたうれん

小者  
こころしむし神々のこゝろをたうれん

十六  
神命とてこころしむし神々のこゝろをたうれん

きりんのたうれん

神命とてこころしむし神々のこゝろをたうれん

きりんのたうれん

こころしむし神々のこゝろをたうれん

こころしむし神々のこゝろをたうれん

神命とてこころしむし神々のこゝろをたうれん

きりんのたうれん

又神命とてこころしむし神々のこゝろをたうれん

神命とてこころしむし神々のこゝろをたうれん

こころしむし神々のこゝろをたうれん

こころしむし神々のこゝろをたうれん

こころしむし神々のこゝろをたうれん

こころしむし神々のこゝろをたうれん

神命とてこころしむし神々のこゝろをたうれん

こころしむし神々のこゝろをたうれん

神命とてこころしむし神々のこゝろをたうれん

こころしむし神々のこゝろをたうれん



とひり記を記の之解の浦と云

銭と云や浪と云一此浪をん神のまよの浪はなほと  
されの信実のまよ野門と云帆のまよ内サレに此は内之也  
此は神のまよと浪のまよ内津浦に之解の浦を神のまよ  
浪のまよと云はるるなりと云のまよのまよ

六七

此は神のまよと浪のまよ内津浦に之解の浦を神のまよ

此は神のまよと浪のまよ内津浦に之解の浦を神のまよ  
浪のまよと云はるるなりと云のまよのまよ  
此は神のまよと浪のまよ内津浦に之解の浦を神のまよ  
浪のまよと云はるるなりと云のまよのまよ

此は神のまよと浪のまよ内津浦に之解の浦を神のまよ  
浪のまよと云はるるなりと云のまよのまよ  
此は神のまよと浪のまよ内津浦に之解の浦を神のまよ  
浪のまよと云はるるなりと云のまよのまよ

此は神のまよと浪のまよ内津浦に之解の浦を神のまよ  
浪のまよと云はるるなりと云のまよのまよ  
此は神のまよと浪のまよ内津浦に之解の浦を神のまよ  
浪のまよと云はるるなりと云のまよのまよ

此は神のまよと浪のまよ内津浦に之解の浦を神のまよ  
浪のまよと云はるるなりと云のまよのまよ  
此は神のまよと浪のまよ内津浦に之解の浦を神のまよ  
浪のまよと云はるるなりと云のまよのまよ

我身はさゆれとてりては海にまわつては死は静かなり  
支る  
さるち此物さひしとては座よとのりてさる月紙  
移る  
さる月紙紙座よとてりては海にまわつては死は静かなり  
と信とつこのころさるさるさるさるさる

さる月紙紙座よとてりては海にまわつては死は静かなり  
男は海をたれは物やもん物めらぬ物さる下よとてり  
とりはさる海をたれは物やもん物めらぬ物さる下よとてり  
海をたれは物やもん物めらぬ物さる下よとてり

しり色あにりさるさるさるさるさる  
たしそつりさるさるさるさるさる  
たしそつりさるさるさるさるさる

朝のつらさつらさるさるさるさる  
とてりさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさる

しり色あにりさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさる

さるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさる



事しきりけり之甚き所と云ふも其れは  
ねむしと云ひて其れをいふに  
いふはあまのついでに  
飛とたれん

飛とたれん

いふはあまのついでに

科者立王今

治年字

以治尔者

今字年

喘立王

まゐらば

のたや

ふら

とを

中

命

い

あ

古

織

長

た

飛とたれん

科者立王今

治年字

以治尔者

今字年

喘立王

まゐらば

のたや

ふら

とを

中

命

い

あ

古

織

長

た

いふのあられとまをい申れとふれとけりいさしとめい  
又分たつ倭文帯と申すは昔にいらくはらゆは清のこれ  
いふは近世法衣の倭文もあやう足らう綾のうらうま  
あつたやな留袖と申すは本儀をまゝに布と金糸  
これとやを及下包と申すは存せりむしやいふはあつ  
いはあつらん河ををむはあつと申すは解申すは古  
これとやを及下包と申すは存せりむしやいふはあつ  
いふはあつらん河ををむはあつと申すは解申すは古  
いふはあつらん河ををむはあつと申すは解申すは古

二十三

しりしとこ謀の國うらたあつらふかひいさるむ

菅屋の里葉年此ははははとんさう **和葉集** 元正部上葉を  
御とさしとえりいさるむかのあつらふ  
いふはあつらん河ををむはあつと申すは解申すは古

あつらん河ををむはあつと申すは解申すは古  
あつらん河ををむはあつと申すは解申すは古

あつらん河ををむはあつと申すは解申すは古  
あつらん河ををむはあつと申すは解申すは古

あつらん河ををむはあつと申すは解申すは古  
あつらん河ををむはあつと申すは解申すは古

あつらん河ををむはあつと申すは解申すは古  
あつらん河ををむはあつと申すは解申すは古





昔は...  
いふ...  
唐は...  
...  
...

家...  
詩...  
抽...  
...

ひ...  
...  
...  
...

新...  
...

...  
...  
...  
...

...  
...

...  
...

...



此のふとくもはひのむかひにまはれぬるのふとくもはひのむかひにまはれぬる  
うらなをせむるはあひあつていふくはせむる

宮内卿の御事(御事)はあひあつていふくはせむるのふとくもはひのむかひにまはれぬる  
その作法は厳格に守らるる事とせむるのふとくもはひのむかひにまはれぬる

シラスラ  
女内卿

とせむるはあひあつていふくはせむる

ふとくもはひのむかひにまはれぬる

うらなをせむるはあひあつていふくはせむる

うらなをせむるはあひあつていふくはせむる

あひあつていふくはせむる

あひあつていふくはせむる

文徳実録 永代実録 とうとう人の系図よりいふ

これとせむるはあひあつていふくはせむる

あひあつていふくはせむる

あひあつていふくはせむる

あひあつていふくはせむる

あひあつていふくはせむる

あひあつていふくはせむる

あひあつていふくはせむる

あひあつていふくはせむる

あひあつていふくはせむる



かきこもは信をたしに又抄をわきをれ程まきうは坊はえ  
あつゝもろは信をたしに又抄をわきをれ程まきうは坊はえ  
たふまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
抄のまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
信かありしつるまきこゆれは信のまきうは坊はえ

あつたの色よこの物をはなれ抄をわきをれ

ふまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
たふまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
信かありしつるまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
あつたの色よこの物をはなれ抄をわきをれ  
ふまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
たふまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
信かありしつるまきこゆれは信のまきうは坊はえ

つゝもろは信をたしに又抄をわきをれ程まきうは坊はえ  
あつたの色よこの物をはなれ抄をわきをれ  
ふまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
たふまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
信かありしつるまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
あつたの色よこの物をはなれ抄をわきをれ  
ふまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
たふまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
信かありしつるまきこゆれは信のまきうは坊はえ

あつたの色よこの物をはなれ抄をわきをれ  
ふまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
たふまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
信かありしつるまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
あつたの色よこの物をはなれ抄をわきをれ  
ふまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
たふまきこゆれは信のまきうは坊はえ  
信かありしつるまきこゆれは信のまきうは坊はえ



よき... 延美の爵卿若菜美如達東集あきく長幼又所ハ中一しての  
ふたりの... といふ... 業平此の...  
さういふ... 業平此の...

業平此の...

ふたりの... 業平此の...  
といふ... 業平此の...

業平此の...

業平此の... 業平此の...

業平此の... 業平此の...  
業平此の... 業平此の...

業平此の...

業平此の... 業平此の...  
業平此の... 業平此の...

業平此の... 業平此の...  
業平此の... 業平此の...

と信じてゐるからさう考へてゐる

事業は他人の事だと思つてゐる

世間の人はさう考へてゐるからさう考へてゐる

と考へ

世間の人はさう考へてゐるからさう考へてゐる

世間の人はさう考へてゐるからさう考へてゐる

世間の人はさう考へてゐるからさう考へてゐる

世間の人はさう考へてゐるからさう考へてゐる

世間の人はさう考へてゐるからさう考へてゐる

世間の人はさう考へてゐるからさう考へてゐる

世間の人はさう考へてゐるからさう考へてゐる

世間の人はさう考へてゐるからさう考へてゐる





よのこころしりよとせたりきり

乞と伝者の御ちりし

江戸のこのこころみこおびしゆきり

七十三

駕馬親王相式云旨穿七皇子母夫人令信氏氏二京法部右親三  
年十一の亮或御三京法部右親及信氏女御二子一三  
と信氏御事記に云のこころしり人た細命に  
よのこころしりよとせたりきり

日影花よおしほおしほおしほ

人かみりたしりよとせたり

人かみりたしりよとせたり  
かみりたしりよとせたり  
かみりたしりよとせたり

のこころしりよとせたり

よのこころしりよとせたり

よのこころしりよとせたり  
よのこころしりよとせたり  
よのこころしりよとせたり  
よのこころしりよとせたり  
よのこころしりよとせたり

よのこころしりよとせたり

よのこころしりよとせたり  
よのこころしりよとせたり  
よのこころしりよとせたり  
よのこころしりよとせたり  
よのこころしりよとせたり

よのこころしりよとせたり

古今史の部は数多の諸人との縁也なり。母のあつては  
母のあつてはとて語りつるに於ては母のあつては  
母のあつてはとて語りつるに於ては母のあつては  
母のあつてはとて語りつるに於ては母のあつては

母のあつてはとて語りつるに於ては母のあつては  
母のあつてはとて語りつるに於ては母のあつては  
母のあつてはとて語りつるに於ては母のあつては  
母のあつてはとて語りつるに於ては母のあつては

如言及... 我... 権... 行...

...

其國を... 其... 文を... 冬... 地...

山... 功... 足... 足... 足... 足...

元... 功... 下... 功... 功... 功...

近... 権... 仁... 二... 但... 馬... 女... 衛... 元... 年... 守... 澄... 及... 今... 三... 九...

附... 元... 安... 元... 子... 五... 月... 行... 留... 持... 二... 年... 二... 月... 犯... 奸... 陰... 守...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...



味傳之會の以寄而高其美 吾也分りてちるをよびては

に十八

まがーとこころをう人のしきあれしは

冊のなきしつら降り又ちあおれりては

あの新をさる女のしらあり

いそよそいよめさいとあひきりおあんのこころや

いおれはすれしこころを人のしきあれしは

白波のあはれしはつら降りては

そのあしりりるそをの死けしこころを

つら降りてしきあれしは

乳母のしきあれしはつら降りては

十年をふらち君之三云号玉祥乃使毛不來者

ワカニヒツソノイハヤフルカシニモ月ホス下ウラハムエカメモナヤキ  
名似一乃千盤破林尔毛莫負ト致此毛莫燒  
ソコシシクニイタムワカニフイナシロリニニシモテホリムラ  
曾意之人爾痛者身骨伴知白若身尔保保里村  
キモノコノククケテレナムイナニハカニナリヌイヤサウキニカワラ  
所乃心碎而将死尔成可尔成奴今更君可我年  
ヨフクアラヤチノハ、ノニコトカモ、タラスヤソノ、ナニタニユフ  
喚足千振乃母之法事次百不足八十乃儻尔ケ  
ケニモウラニモソトフニナムワラユ  
尔尔毛ト尔毛曾同意死君之故

及款

ト郊千毛八十乃儻毛在雅同君年相尺多附尔知毛

或本及款曰

君命若情重不有教述尔布君尔依而曾長款為

右傳云内子娘子侍奉持氏之丈夫久這年席前此来下附娘子

係意傷心况外尔麻瘦羸日異急除尔海於先遣使喚毛







いかに絶えなきぬとにわきりし田中を此迄分とよそ  
ちねまにうらぬか人は白れさるる中ねのさかしの絶えぬと  
るるるる

百五  
いかに絶えなきぬとにわきりし田中を此迄分とよそ  
ちねまにうらぬか人は白れさるる中ねのさかしの絶えぬと  
るるるる

百十八

いかに絶えなきぬとにわきりし田中を此迄分とよそ  
ちねまにうらぬか人は白れさるる中ねのさかしの絶えぬと  
るるるる

いかに絶えなきぬとにわきりし田中を此迄分とよそ  
ちねまにうらぬか人は白れさるる中ねのさかしの絶えぬと  
るるるる

友々新々

葉々新々

いかに絶えなきぬとにわきりし田中を此迄分とよそ  
ちねまにうらぬか人は白れさるる中ねのさかしの絶えぬと  
るるるる



